

「温もりのある交流の舞台」

グラントワでありたい

副センター長 樋野輝男

今夏は、例年になく雨の日が多くうっ
とおしい日々でしたが、そんな中でグラ
ントワ内の石見美術館で開催している黒
田清輝展の「湖畔」の涼やかな名画は、
私にとって一服の清涼剤となりました。

広報に用いた「名画で涼もう」のキャ
ッチコピーのとおり、絵の前に立つと、
浴衣を着た女性（後の黒田夫人）の醸し
出す雰囲気と夏の湖畔の風景から、涼し
さが伝わってくるようでした。教科書や
切手の図案にも採用され、近代日本洋画
史上で最も有名な一枚になったのがうな
ずけるような気がしました。

さて、平成十七年十月のグラントワ開
館から、まもなく四周年を迎えようとし
ています。

おかげさまで、これまでに百五十万人
に達するほど多くの皆さんにグラントワ
へご来館いただいております、心から感謝申
しあげます。

所在地である益田市の人口が約五万人

であることから考えると、この来館者数
はとてつもなく価値ある数字です。グラ
ントワ開館時からかわってきた一人と
してうれしかぎりです。

これも、グラントワの開館以来、地域
の皆さんやボランティアの皆さんに支え
られた結果であることは言うまでもあり
ません。

七月には、さらなる飛躍を目指して、
県内外の様々な地域・多くの人たちとグ
ラントワの交流の橋渡しをするグラント
ワ交流大使（アテンダント二名で構成）
も誕生し、施設を身近に感じていただけ
るよう活動を行っています。

今後とも、「来てよかった」と感じて
いただけるような「温もりのある交流の
舞台」グラントワを、地域やボランティ
アのみなさんと私たち職員が一丸となっ
てつくりあげていきたい。そんな思いで
いっぱいです。

グラントワ

交流大使

になって

アテンダント 河上 瞳

私と日和千草さんの二人は、七月半ば
から、『グラントワ交流大使』として、展
覧会のPRをさせていただいています。

この『グラントワ交流大使』という名
は、グラントワと多くの方々との交流の
架け橋のきっかけづくりになれるよう
と名づけていただきました。

これまで島根県内各地や広島・山口へ
行き、展覧会PRの為に挨拶をさせて頂
いたり、テレビ出演をさせて頂いたり
と貴重な体験ばかりで、新しい発見がたく
さんあります。

これまでの経験で感じた事のひとつ
は、「笑顔を絶やさないと」ことが言葉で言
う以上にとても難しかったことです。人
と会話をしながら笑顔で話すというの
は、色々な顔の動きがあるので自然にす
る事が出来るのですが、会話のない待機
の状態で笑顔を保つのは、顔の筋肉が震
えピクピクしてくるのです。わかってい
たつもりでしたが、待機の笑顔でずいぶ
んと顔がピクピクし、自分が今まで出来
ていなかったと改めて実感しました。こ

れからどんどん、顔の筋肉を鍛え上
げていきたいと思えます！

『グラントワ交流大使』となり、こ
れまで多くの方々とお会い、お話を
させていただく中で、グラントワが
たくさんの方から親しまれ支えられ
ていることを実感しました。

県外でも「あ！ここ行ってみたか
ったの」「すばらしい施設ですよね」
「どうやって行ったらいいですか？」
と関心を持って下さっている事を感じ、島根県内の訪問地でも「ポスタ
ーどこに貼ったらたくさんの人に
もらえるかな」「私達もぜひ見
に行かせてください」と暖かい
言葉を頂きました。

そうした方々とグラントワとの繋
がりや大事にし、今まで以上に交流
を深められるよう努めていきたいと
思っています。

『グラントワ交流大使』である私達
を見かけたなら、ぜひ声を掛けてくだ
さいね！



「東京都交響楽団 特別演奏会」に思う

企画広報課 木原 義博

来る9月5日(土)にグラントワにおいて「東京都交響楽団特別演奏会」が開催されます。東京都交響楽団は管打楽器も弦楽器も非常にレベルが高く日本を代表する楽団の一つですが、益田市出身の岡崎耕二氏が首席トランペット奏者として在籍されています。

実は私は岡崎耕二氏と高校時代の同級生(部活動は違いましたが)ということ、今回の演奏会には特別な思いがあります。私は超体育会系人間ですので、この種の分野は恥ずかしながら人生四十ウン年間触れたこともなかったのですが、彼はそんな私に対等に接してくれますので、お陰で自分なりに日々新しい発見があります。また、岡崎氏と接し色々な話をする中で、彼の苦労話を時々聞くことがあります、彼の良さはその苦労を表に出さないとこ

ろでしょうか！
高校在学中に寝台列車に揺られて東京に何度もレツスンに行ったこととか、音楽大学卒業後、生活が厳しいながらも「アルバイトをしているようだったら終わりだ」と思い練習に明け暮れた話など、聞いていると自分のつまらなさを痛感すると

同時に、一つのことを貫き通す大切さを教えられます。

その岡崎氏が在籍する楽団が故郷の益田市で演奏会を行うことは岡崎氏本人にとって大変重要な意味を持つことだと思えますし、私も職員としては当然のことながら、同級生として、一市民として素晴らしいことであると感じています。一楽団員としての来館ですので余り表には出せませんが、「凱旋公演」的な要素が強いのではないのでしょうか？ポスターとかチラシには指揮者・ソリストを掲載することが常ですが、今回はその横に岡崎氏の写真を掲載したくても出来ないことが担当者として残念でなりませんでした。

宣伝になつてしまい恐縮ですが、是非ともハイレベルな演奏をお聴きいただくとともに、岡崎氏の雄姿をご覧いただきたいと願うばかりです。

「くるみ割り人形」

でクリスマス

情報ボランティア 大庭 明博

チャイコフスキーの三大バレエのひとつ「くるみ割り人形」は、「白鳥の湖」

「眠れる森の美女」に続く最後の作品で、少女とくるみ割り人形がクリスマスの夜

に繰り広げる物語は、クリスマス・シーズンに世界中の劇場で冬の風物詩として親しまれています。

当時のバレエ音楽は、女性の踊りを楽しむためのもので、音楽は単なる伴奏に過ぎませんでした。チャイコフスキーは交響曲やオペラに對すると同じ姿勢で取り組み、ファンタジーに彩られた一夜の夢のようなお話に、魅力的な曲の数々を作曲しました。バレエや舞台美術はもちろんです。聴き覚えのある親しみやすいメロディーが多彩に楽しめて素敵です。

例えば、振付師のマリウス・プティパは音楽の調性や小節数をはじめ、リズムやテンポといった事まで注文をつけチャイコフスキーに作曲を依頼したなかで、あの甘く軽やかな旋律が有名な「こんぺい糖の踊り」などでは「噴水の水がはねる音が聞こえるように」とあり悩みますが、折りしもアメリカへ渡る途中、パリでチェレスタという新しい楽器を見つけ、曲中に見事に活かして、期待に応えました。チェレスタは天使の響きという意味だそうですが、鉄琴より柔らかな印象的な音色で、夢見心地の童謡のような旋律を奏でます。

雪片のワルツ・花のワルツでの詩情

豊かなコール・ド・バレエ(群舞)や全編の圧巻、ラストのパ・ド・ドウ(男女2人によるデュエット)など、みどころが一杯のキエフ・バレエ「くるみ割り人形」は十二月十二日(土)グラントワ大ホールで上演されます。クリスマスも近づく冬の一夜に、夢の中へ行つて見たいと思いませんか。なお、美術館ロビー・アートライブラリーではDVDを視聴できますので利用されてみてはいかがでしょうか。



「合唱塾」に参加して

情報ボランティア 洗川 紀子

八月九日「ジュニア・コーラス・フェスタ in 益田」がグラントワの大ホールで開催された。それに初めて出た。以前から石見合唱塾に入会したいと思っていたのだが、それは、「高嶺の花」に思っていた。

しかし、その機会が、ひょんなどころから実現した。

最近知り合った、○さんが合唱塾に参加しているのだが、「行かないか」と誘いを受け、迷ったが入会した。

確かにハイレベルな合唱集団である。世界的な合唱指揮者の栗山文昭先生、先生の指導がまた素晴らしいのだ。

先生のユーモア・ウィット・丁寧な音声指導。なんだか、初心者私も、声が出るような気がした。

新人ながら私は歌うことに、強く意欲を感じた。

これは栗山先生の人間的な魅力でしようか。教師とはこれではなくてはと思っ

た。
人生において優れた教師との出会いは人を変え、意欲を高め、希望を実現さ

せる何かがある。実は私も教師だった、

これまで生徒を自分の教科でこんな風に思わせたことがあったかな？と自己反省した。そして先生の言葉、人は何歳になっても「挑戦することが大切です。」いい言葉だ。私はこれに勇気ももらった。

さて、その当日、午前中は、練習、午後は、本番、寺島陸也先生の作曲、演奏で「ふろしき」を、そして「宵待ち草」など熱唱した。

私は多分に、皆様の素晴らしい歌声のなかで、そっと間違えないように緊張して歌った。

練習のときは、浅井道子さんのピアノ伴奏もあり、本当に一流の指揮者、演奏者の指導であった。

この山陰の小さな町で大都会並みに指導者に恵まれての練習、とにかく贅沢なことだ。

一流に触れることで、音楽のレベルがあがるのだろう。

とにかく、いつも高い理想をもたれて、企画運営に努力されている館長さんをはじめ職員のご支援に感謝します。



上左、合唱塾練習風景



上右、合唱団歓迎風景

歓迎会風景

八月八日(土)翌日に、ジュニア・コーラス・フェスタ in ますだ、09、を控えて、はるか長野県より到着したカノラ少年少女合唱団、総勢約百三十名を歓迎し、劇場スタッフとボランティアが協働し昼食会を催したときの風景です。

左、合唱団歓迎風景



映画との出会い

映画ボランティア 空 修子

みなさんのはじめての映画との出会いは何ですか？

私は、記憶が薄くなっていますが、多分五・六歳のころ姉につれていつてもらった江利チエミ主演の「サザエさん」ではないかと思えます（古いですねえ）。

小学生時代は、学校の講堂でのまんが映画や科学映画の上映。それから下校後、家のテレビで古い洋画（「哀愁」とか「レベッカ」とか観たような記憶も。）

そして高校時代にはじめて友達と映画館に。それが「サウンドオブミュージック」だったか「ウェストサイド物語」だったか定かではありません。でも初めて一人で映画館に行ったのは「戦争と平和」（ソ連の映画）だったとはっきり憶えています。その後一人で映画を見に行くことは数回しかありませんでしたが、友達と数人で行ったことよりもドキドキ感とその時の自分ごととか合わせて印象強く残っています（益田の映画館で他に観客がなく、まったく一人の時もありました）。

グラントワは、一人でも抵抗なく安心していけるのでうれいことです。なかなか山口や広島まで観にいけなないので月一回の

グラントワシアターは気軽に往けて助かります。

私の故郷・尾道は、小津安二郎の「東京物語」や大林宣彦の「転校生」などの舞台になり映画の町と言われています。その尾道でも一時映画館が無くなり淋しく思っていました。今若い人たちがNPOで映画館を再開したと聞ききました。益田でも映画館がなくなりグラントワシアターへの期待が高まっています。映画部会もがんばらなくては。

私は映画通ではなく、ごく普通の中年女性として、映画ボランティアに加わっています。会議では自分が見たい、みんなに見てもらいたい映画など勝手きままに意見を出しています。上映料や配給会社との関係で、なかなか希望がかないませんが、自分の希望の映画が上映されることになったり、観た人からも「よかったね」といわれるととてもうれしいものです。これを読まれたあなたも、月二回火曜日の部会にぜひ加わってください。お待ちしております。

ボランティア便り

フロント・ボランティア

永峰 佳子

この素晴らしいグラントワも十月で



8月21日(金)午前11時、石見美術館特別企画「黒田清輝展」入館者一万人達成。

あ
と
が
き

「天高く馬肥ゆる秋」は、その昔、中国はモンゴル高原に匈奴という騎馬民族がいて、秋になると漢民族が育てた農産物を奪いとり、それを食べて馬が肥える。という、漢民族の警告として語源を持つそうです。

私たちのこの秋の警戒は、新型インフルエンザですね。衛生には気を付けましょう。

本誌は友の会、並びにパスポート会員の方々のグラントワでの催し物に向けた期待・紹介・感想などの投稿をお待ちしております。どうぞお気軽に事務局までお持ちくださいますようお願いいたします。

早や四年になります。これまでに多種多様な催物・コンサート等々、各方面からたくさんのお客様を迎えています。そこでボランティアの方々が多忙な中活躍され、お客様に満足していただいています。何て素敵な事でしょう。又、時には事務局の方で、視察等交流を深める機会を作って頂き有難いですね。ただ私は仕事の都合上、欠席が多く、サブ・リーダーとは名ばかりで、皆様に申し訳ないと思っています。せめて裏方として出来る事はと、リーダーのAさん、Sさんと共にお役に立てればと・・・

ボランティアの方々との出逢いを大切にし、又、お客様に楽しんで頂けるよう、努力したいと思えます。